

---

書評

---

M. James & C. Crabbe (Eds.): *From Soul to Self* (Routledge, 1999, xi+158p.)

太田 和則

---

本書のテーマは、魂と自己の問題である。——より正確に言えば、これは、魂あるいは自己をとりまく諸々の問題に対して、様々な分野で活動する七人の研究者達が、各々独自の立場から取り組んだ論文集である。「魂とは何か」「我々は魂を持つか」「人間以外の動物は魂を持つか」「魂は自己から区別できるか」「自己とは何か」——。こうした問題を、各論文は、哲学や生理学をはじめとする幅広い見地から扱っていく。始めに注意しておく、魂あるいは自己と述べたように、一見すると一つ一つの論文は、必ずしも両方のテーマを扱うようには見えない。しかしこの理由は、各論文の間で何を魂や自己と呼ぶかが厳密には同意されていないからに過ぎず、二つのテーマが分裂して扱われているということではない。定義が共有されていないことはむしろ、本書が魂や自己の問題について、全体として、より広範な視野からの示唆を与えることを助けていると思われる。ただし、そのぶん内容は多岐に渡り、この場で網羅的な紹介はできない。以下ではひとまず、各論文ごとの概要を紹介する。むしろ一部の論文に限った、より詳細な話をと期待さ

れるかもしれないが、既に触れたように本書の一つの長所は、全体を通した視野の広さそのものにあると、評者には思われる。

最初の論文は、R. ソラブジによる。前半部で彼は、ホメロスからプラトン、アリストテレス、新プラトン主義に至るまで、西洋古代哲学史上の様々な魂観を概説する。魂と聞くと、不死だとか肉体から離れてあるとか、そういう性格を思い浮かべる人がいるかもしれない。しかし当時の魂観は、不死性や肉体との関わりをはじめ、多くの点で、幅広いヴァリエーションを持っていた。例えばアリストテレスは生物の活動に着目し、魂とは、生体活動における一揃いの能力（栄養の摂取や、感覚知覚など）だと考えたが、現代的な見地から見ても、このような意味での魂を我々が持たないと言うのは難しい。我々が魂を持つのかという疑問への答えは、ひとえに、我々がどのような魂観を持つのかということに依存している。後半部でソラブジは、古代における自己というテーマを取り上げ、自己イコール魂といった見方は一部のものに過ぎず、魂観の時と同様、多様な自己観があったことを報告する。時間を通した自己の持続や、個体としての自己の識別という近代的な問題にも触れ、こうした問題の由来が、古代期にあることも指摘している。

第二の論文は、A. ケニーによる。彼はトマス・アキナスの認識論を背景として、個体や自己を認識する際の哲学的問題を論

じる。彼の議論のうち、本書のテーマに関連して特に注目すべきは、我々が自己を持つということがナンセンスだとする主張である。ケニーによれば、私は他ならぬ私自身と同一であり、その意味で私自身 (myself) とは、私が持っている自己 (myself) ではあり得ない。例えば、肉体を有する人間であるような私が、その私自身とは同一でないような(精神的な自己といった、肉体を有する私の非肉体的な一部分であるような) 自己を持つと考えるのは、哲学的な混乱だ。ケニーは、こうした混乱のもとで想定される「自己」を幻想として取り上げる一方、その元凶として、人の一部分に過ぎない精神や内的感覚の主体を「自己」とする、デカルト的あるいはロック的な自己観を批判している。彼はまた、私の思考がまさに私の思考と言える理由は、その思考が私の肉体によって表現されるからだ」と主張し、人間の自己認識における、肉体の重要性を擁護している。

第三の論文は、K. ウェアーによる。彼は、二世紀以降にギリシアで活躍した、キリスト教学者達の神学的魂観について論じる。当時、魂とは何かという問いははっきり答えられていなかった——が、広く同意されていたことが二つある。一つは、我々の魂が、神の像 (image) の内に創造されているということ。もう一つは、魂と肉体が、一つの不可分な統一を構成するということだ。当時の神学者達は最初の同意のもとに、像というものが本来持つ他律的なあり方に

人間のあり方を重ね、その自己観や自由観を、神との関係なしには分析され得ないものだと考えた。また二番目の同意のもとに、彼らは、人間における自己を単に魂だというのではなく、魂と肉体の統一体だとする考え方に至った。後半部でウェアーは、この心身統一的な自己理解を象徴する「こころ (kardia)」の概念を取り上げ、また、当時における知性 (nous) の、単に理性的なものにとどまらない働きの解釈などを紹介する。

一風変わった第四の論文は、P. リヴィエールによる。彼は南米における近年の人類学研究の成果のもとに、先住民族の人々の間に今なお強く息づく魂観について報告する。後述するように、基本的には魂というテーマの衰退を描く本書の中では、少々異質な位置づけを与えられるべき論文である。ゆえに、ここで詳しくは紹介しないが、内容は極めて刺激的だと付け加えておく。

第五の論文は、G. マッシューズによる。彼は人間以外の動物に精神としての魂を認めるのか否かという問題について、肯定的な立場をアウグスティヌス、否定的な立場をデカルトやデイヴィドソンらに代表させつつ論じている。アウグスティヌスにおいて、他人が精神を持つと考えられる際の根拠となる「類似的推論」が、動物にも適応できるか否かが争点の一つとなる。類似的推論とは、人がこれこれの心的内容を持つ時に行う肉体的動作と、よく似た動作をしている他者の肉体に気付く時、心身の内容

の相関性を前提した上で、その他人が自分と同様にこれこれの心的内容を持つだろうと推論する作業だ。アウグスティヌスにおいて、この作業が動物に対しても行われる背景には、人間と動物とがある程度共通した心的内容を持ち得るとする原理の想定がある。これに対してデカルトらは、言語使用の有無によって人間と他の動物の精神の有無を厳格に区別する方針を採る。しかしマッシュューズはこの方針を吟味した上で、それが、人間の幼児による言語習得の理解さえ困難にする、不当なものであることを指摘する。

第六の論文は、S. グリーンフィールドによる。彼女は神経科学の立場から、脳の活動が、意識としての自己をどのようなものとして生み出すかについて考察する。例えば、彼女は意識に関して、多くの実験結果をもとに、興味深い三つの性質を提唱している。第一に、意識はそれ自体統一されていても、その働きは、脳内の特定の領域ではなく、空間的にばらばらな複数の領域の活動に由来している。第二に、意識はその程度を許し、程度を変化させる。例えば、人と他の動物との対比において、あるいは大人と新生児との対比において、それぞれ後者に意識があるかないかがしばしば問題にされるが、この性質を考えるとその問題は、どれぐらいあるかというところに妥協させて扱われる。第三に、意識は常に特定の刺激に由来する。我々は全てのことを意識するというのではなく、何か特定の

ものを意識するからである。グリーンフィールドはこれらの性質を合わせ持つものを、意識の暫定的定義として採用している。

最後の論文は、G. ストローソンによる。彼は、非肉体的な、精神的なものとしての自己を、それが一人称的視点からどのように感覚されるかという現象学的考察を通して、肯定的に取り上げる。彼はまず、そうした自己の想定に対して、第二の論文の著者ケニーが挙げた批判の一バージョンに反論する。この批判をやり過ぎした後で、ストローソンは、自己の感覚の仕方に関する幾つかの特徴づけを考える。彼の自己観に独特なのは、ここで人格性とある種の通時的同一性の感覚が、自己の感覚にとって必要でないと見なされることにある。彼はまず前者の必要性に反対し、例えば実際に人格の喪失した状態というものが、極度の疲労状態やうつ状態などにおいて経験され得ると主張する。また後者の必要性に対しては、自己を感覚する際に、自らの過去や将来のことについて考慮している必要が、必ずしもないことなどが論じられる。こうした自己観と平行して後半部では、意識の継続が断続的なものであることが強調され、意識の絶え間ない連続性を考える立場への反対が表明される。

以上のような各論文は、魂、自己、精神、意識といったものにまつわる諸問題を、それぞれが分担する形で扱っており、結果、本書の内容がカバーする範囲は、極めて幅

広なものに仕上がっている。こうした問題についてどのようなトピックがあるかを調べる読者にとって、本書はまず、有益なガイドブックとして働くことが期待される。

もう一つ、本書の重要な特徴に触れておく。各論文を通しては、思想史上のあるテーマの変化が描かれている。タイトルにもある、「魂から自己へ」という変化がそれである。ただしこの変化は、文字通りのものではないと評者には思われる。例えばソラブリジが報告するように、古代期においてすら既に、魂とイコールでないような自己観が存在していた。各論文を読み比べる限り、この変化は、「魂から自己へ」と言うよりはむしろ、単に魂というテーマの（あるいはその用語の）衰退であるように見える。

衰退の一つの理由が、次の仕方で示されている。変化の最前線にいる一人、グリーンフィールドは、精神や意識を「死に得る魂」に例える。彼女によれば、現代の科学者達は、不死性という特徴を捨て、より正確に精神や意識と対応させられるようになった「魂」を扱っている。魂にしばしば帰された不死性——ソラブリジは彼の論文の冒頭で、この不死性への疑いが、魂への信用が現在ためられる理由の一つだと明言している。魂というテーマの衰退の背後には、不死性というテーマの衰退があるのだ。

評者としてはここで、次のことを注意しておきたい。仮に不死性というテーマの衰退が、魂というテーマの衰退を招いたとしたら、それは一種の無理心中の結果だと言

えるかもしれない。実際、不死性を持たない魂を、そのまま意識や精神のことだと考え直していくのは容易でない。古代のエピクロス派についてのソラブリジの報告に見られるように、魂というテーマはしばしば、たとえ死に得るものであれ、自己（あるいは意識や精神）と生死の問題を結びつける働きを持つものであった。この点で魂は、そのまま意識や精神に置き換えられるべきものではないと言える。見方を変えれば、魂というテーマの衰退と平行し、自己論や意識論が、こうした生死の問題の取り扱いをないがしろにしつつあるおそれがあると思われる。肝心なのは魂ではなく、こうした自己にとっての生死の問題の行方である。

この行方に関して、最後にストローソンの試みを紹介しよう。彼は自己の死について、特に死の恐怖についても、本書の中で論じている。既に述べたように、彼は感覚される自己について、ある種の通時的同一性の成立が不必要だとみなす。しかし、ならば未来にあるはずの自己の死が、何故実際に恐怖されるのかとストローソンは自問する。正直なところ評者は、自己が恐怖の感情を持つと認めることは、そもそも感覚される自己に人格性を考える必要がないとした彼の主張と、衝突するのではないかと疑っている。ただし一方で、ストローソンの問題意識自体は、現代的な立場から自己と生死の問題を結び、魂なきあとの自己論を補完するものとして、意味のある働きをするものと思われる。